生きることは絵を描くことに値するか　上

破天荒な日本のゴッホ、長谷川利行と養育院

栄畑南美（えばた　なみ）　老年学情報センター

櫻園通信 57　令和 2 年 4 月
東京都健康長寿医療センター
養育院・渋沢記念コーナー
連絡先：老年学情報センター

絵を描くことは、生きることに値するといふ人は多いが、生きることは絵を描くことに値するか

そう問うたのは、昭和初期の東京を描いた放浪画家、長谷川利行です。利行は、破天荒な生き方とその画風から「日本のゴッホ」とも呼ばれています。

最近では、2020 年 2 月 25 日テレビ東京系にて放送された「開運！　なんでも鑑定団」という番組で、利行の未発表の作品ではないかという絵が鑑定されていました。

この絵は残念ながらニセモノだったのですが、2009 年に同番組で鑑定された本物の利行の作品は、なんと 1800 万円の鑑定額が付いたとのことです。

この作品が、番組で鑑定された作品「カフェ・パウリスタ」です。現在は、東京国立近代美術館が所蔵しています。

利行の絵は自由奔放な筆致が特徴ですが、利行自身もかなり自由奔放で壮絶な生き方をした人物だったようです。

そして、利行が人生の最後を過ごしたのが、東京都健康長寿医療センターの前身である養育院でした。

では、長谷川利行という人物と**養育院**のつながりを、紐解いてみましょう。

長谷川利行、愛称「りこう」は、1891 年に京都府で生まれました。

青春時代は文学に熱中し、詩や短歌を創作しました。

独学で絵を学び 30 歳頃に上京しますが、関東大震災で被災し一時京都へ戻ります。

その後再び上京し、第 14 回二科展で樗牛賞（ちょぎゅうしょう）、第 3 回 1930 年協会展で奨励賞を受賞するなど、徐々に画家としての評価を高めていきました。

この作品は、第 14 回仁科展で樗牛賞を受賞した作品「麦酒室」です。利行は決まったアトリエを持たず、街を放浪して絵を描いていました。

利行が描いたのは、バーやビアホール、カフェ、ガスタンクや地下鉄の雑踏などの東京の風景とそこに生きる人々でした。

利行は街を歩き回り、カンヴァスだけではなく、チラシの裏やタバコの空き箱にまで、嵐のように猛烈な早描きで絵を描いたといいます。そして、日々の生活費のために、友人・知人にスケッチや油絵を強引に売りつけました。

利行の生活は、毎晩酒場で安酒を飲み、浅草や山谷、新宿の簡易宿泊所を転々とするなど荒れたものであり、その素行の悪さから、画家仲間たちからは嫌われていたといいます。

（つづく）